

エモリー大学図書館と東アジア研究プログラム

浜野 潔

1 はじめに

2007年10月より1年間、関西大学から在外研究の機会を与えていただき、アメリカ・ジョージア州のエモリー大学（Emory University）に滞在している。ここでの公式の肩書きは歴史学部客員教授であるが、授業は担当せず研究に専念する立場なので、実質的な活動拠点は比較国際研究所（Institute of Comparative and International Studies）というところに置いている。この研究所の中にはいくつかのプログラムがあるが、その中の東アジア研究プログラム（East-Asian Studies Program）が主たる活動の場であり、各種セミナーに参加するなど多くの研究者との交流をはかっている。

今回、関西大学図書館よりエモリー大学を例にとりアメリカの大学図書館を紹介してほしいとの依頼を受けたが、本稿では少し範囲を広げ、図書館だけでなく東アジア研究プログラムについても紹介してみたいと思う。というのも、図書館とこの研究プログラムは単に同じ大学の機関というだけでなく、互いに緊密な関係を持っている点が重要だと考えるからである。具体的には、図書館の中に東アジア研究プログラムを専門に担当するスタッフが在籍しており、研究支援に積極的に関わっている。さらに、のちに触れるが、図書館のスタッフが授業支援においても積極的な役割を果たしていることも特筆すべき点である。したがって、以下では単に施設としての図書館を紹介するのではなく、東アジア研究という分野を例にとり、図書館のスタッフが大学における教育と研究にいかに関わっているのかという点についても明らかにしたいと思う。

2 エモリー大学と東アジア研究プログラム

本題に入る前に、まずエモリー大学について簡単に紹介しておこう。エモリー大学は1836年メソジスト派のカレッジとして設立され、2年後の1838年、

わずか15名の新生・編入生を対象に授業を開始した。170年後の今日、学生数は約1万2千人、教職員や病院スタッフを含めた構成者数は3万人を超えている。現在、メインキャンパスとなっているアトランタ・キャンパスは1つの都市にも匹敵する規模にまで成長したのである。エモリー大学は、日本ではそれほど知名度が高いとはいえないが、有名な*U.S. News and World Report*の2008年度全米大学ランキングでは総合17位という高い評価を受けている。過去には9位という1桁の数字を得たこともあり、アメリカ国内では非常に知名度の高い大学の1つである⁽¹⁾。



エモリー大学本部

エモリー大学の名声を高めている理由の1つは、全米有数の医学部を有していることであろう。同じ*U.S. News and World Report*は、メディカルスクール部門でエモリー大学医学部を23位に位置づけている⁽²⁾。医学部には隣接して、米国疾病予防管理セ

(1) America's Best Colleges 2008 (http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/usnews/edu/college/rankings/rankindex_brief.php)。

(2) America's Best Graduate Schools 2008 (http://grad-schools.usnews.rankingsandreviews.com/usnews/edu/grad/rankings/rankindex_brief.php)。

ンター (CDC: Centers for Disease Control and Prevention) が立地しており、この研究所はアメリカだけでなく世界的にも疾病対策の総本山として有名である⁽³⁾。さらに医学部とならんで、ゴイズエタ・ビジネススクール (Goizueta Business School) も評価が高い。同校は1919年の創立でビジネススクールとして非常に長い歴史を持つが、1994年コカコーラ社のCEOを長く務めたゴイズエタ氏から多額の寄付を受けたのを記念し、同氏の名前を冠することになった。*U.S. News and World Report*は、ゴイズエタ・ビジネススクールを同部門の20位に位置づけている⁽⁴⁾。

このようにエモリー大学は、きわめて有力な専門職大学院 (プロフェッショナル・スクール) を持つ一方、学部教育に非常に力を入れていることでも知られている。アメリカではポピュラーな高校生向け大学紹介シリーズ *College Prowler*⁽⁵⁾ のエモリー大学の巻をみると、学業 (Academics) の項目にはA-というかなり高い評価が与えられているが、とりわけクラスサイズが小さく、学生と教員の距離が近いこと、また研究業績の豊富な教員が多数在籍していることをメリットとしてあげている。

志望大学を決定するに際し、こうした教育の「質」がとくに重視されるのは、多くの学生にとって学部教育が必ずしもゴールではなく、将来の進路を見据え自分のスキルアップをはかる場として意識されるからだろう。実際、エモリー大学のようなトップクラスの大学生は、卒業後、あるいはいったん社会に出たあとで、大学院への進学を考える者が非常に多い。日本のように、大学入学がどちらかといえばゴールであると考えられている状況とは、かなり異なるのである。

このように高い研究レベルを意識しつつ、同時に教育の質も重視するエモリー大学の姿勢は、学部だけでなくいくつかの研究所においても認められる。

(3) 少し余談になるが、ダスティン・ホフマン主演の「アウトブレイク」は感染症と戦う医学者を描いた映画として日本でもヒットした。ここで主人公である軍医サムをサポートしていたのが、エモリー大学と関係の深いCDCである。

(4) 注(2)を参照。

(5) Pope-Roush, Jordan (2006) *Emory University*. Pittsburgh: College Prowler. この *College Prowler* シリーズは、学生からのアンケートをもとに、各大学の学生が編集するというユニークなスタイルの大学紹介であり、書店の大学受験コーナーでよく見かける。

すでにのべた比較国際研究所は国際研究を対象とする研究機関であるが、大学院生にたいしてもリサーチや報告の場を提供しているし、また学部生にたいしても多くの海外研修プログラム (study abroad program) を提供するなど教育機関としての役割も果たしている。

この研究所は全部で7つの地域研究プログラムに分かれている。すなわち、アフリカ研究、アジア研究、東アジア研究、チベットパートナーシップ、ラテンアメリカ・カリブ海地域研究、中東・南アジア研究、ロシア・東欧研究の各プログラムである。東アジア研究プログラムは、中国・日本・韓国を中心として東アジア研究に従事する28名のメンバーで構成されている。うち27名は教員であるが、残り1名は図書館でライブラリアンという肩書きをもつスタッフであることが注目される (2008年1月現在、また、他のプログラムとの兼任であるが、コーディネーターとして事務職員が1名置かれている)。このように、専門領域ごと教員と図書館スタッフが連携する場が用意されていることは、日本の大学にはあまりない特色といえるだろう。

3 エモリー大学図書館

エモリー大学には全部で7つの図書館がある。もっとも大きな図書館は、ウッドラフ図書館 (Woodruff Library)⁽⁶⁾ とよばれておりメインライブ

(6) ウッドラフという名前は、コカコーラ社の社長・CEOを1923年から32年間勤め、今日の世界的大企業に育てたRobert W. Woodruffを記念してつけられた。コカコーラ社におけるウッドラフの事績はPendergrast, Mark (2000) *For God, Country, and Coca-Cola: The Definitive History of the Great American Soft Drink and the Company That Makes It*. 2nd ed., Basic Books (1993年に出版された初版の翻訳は、マーク・ペンダグラスト・古賀林幸訳『コカ・コーラ帝国の興亡—100年の商魂と生き残り戦略』徳間書店、1993年) に詳しい。ウッドラフとその家族は、1979年エモリー大学にコカコーラの株券1億500万ドル分という巨額の寄付を行った。この金額は、当時、アメリカの大学が受け取った寄付金の最高額であった。ウッドラフ家はその後エモリー大学にたいして寄付を続け、その総額は2億3千万ドルに達し、80-90年代に大学が大きく発展する原動力となった。

なお、ウッドラフは若いころエモリー大学に入学したが、成績不良のため卒業することはできなかつ

ラリーとして図書館全体を統括している。この図書館は総合図書館としての役割を果たすとともに、貴重書室、ビジネス図書館⁽⁷⁾、音楽・メディア図書館が含まれる。本稿で主として扱う東アジア関係のコレクションも多くはここに収蔵されているので、以下で詳しくみることにしたい。

なお、エモリー大学にはウッドラフ図書館以外に、化学図書館、健康科学センター図書館、法科大学院図書館、数学・科学センター図書室、神学図書館および別キャンパスにあるオックスフォード図書館（Oxford Library）の6つの図書館があり、オックスフォード図書館を除けば、それぞれ特定の学部や大学院に付設された専門図書館である。この7つの図書館をあわせた蔵書数は、300万冊をこえており、この他、400万点のマイクロ写真、2万3千フィートにおよぶ文書、さらに多くのオンラインジャーナルなどを利用できる⁽⁸⁾。

メインライブラリーであるウッドラフ図書館は病院施設を除くキャンパスのほぼ中央に位置しており、学生・教員にとって非常に便利な場所である。入口は2階にあり、入ってすぐのロビーの部分は4階建てLobby Levelsとよばれる。ここは、下から順に1階には政府資料コレクション、マイクロフィルムコーナー、コーヒーショップなど、2階にはレファレンスデスク、テクノロジーセンター、電子データセンター、図書館間の相互貸借受付など、3階には管理事務室、貸出コーナーがあり、旧館のCandler Library⁽⁹⁾へと続くブリッジも設けられている。さらに、4階は語学センターラボ、音楽・メディアライ

ブラリーとなっている。また、各階に分散して、教室やグループ学習室も設置されており、学生の便宜をはかっている。

入口と反対側は4階以上がTower Levelsとよばれる高層部分になっており、4階から9階の間に書籍・雑誌類が配架されている。並べ方は、米国議会図書館分類法（LCC）に準拠しており、9階のAから4階のZまで、アルファベット順である。非常に単純な配列なので、請求記号さえわかれば目的の本はすぐに見つけることができる。日本の図書館では、ふつう一般書籍と雑誌が別に置かれるが、エモリー大学図書館の場合、書籍も雑誌もすべて請求記号のアルファベット順である。最初は、とまどいを覚えたが、慣れると必要なジャンルの本が1カ所で見つかるので、便利と思うようになった。



ウッドラフ図書館

ところで、この請求記号のアルファベット順は資料の言語を問わない。したがって、たとえば日本語の書籍も1カ所にまとまっているわけではなく、図書館のなかに分散して配架されることになる。この場合、日本史の本は歴史のジャンルのコーナーに集中して配架されており比較的容易に見つけることができるが、日本経済に関する本などは、経済学のコーナーに財政、金融などそれぞれテーマにおうじて分散して置かれることになる。最近、東アジア関係の本はまとめて同じ場所に一括配架してはどうかという意見も出されているようだ。実際、アメリカには特定の言語の文献がまとめて存在する場合、別置の方針をとる大学も存在する⁽¹⁰⁾。

た。図書館の最上階にはウッドラフ記念室が設けられ彼の事績をたたえる資料が数多く置かれているが、その片隅には大学から父親にあてた退学を勧告する手紙も飾られている。新入生のオリエンテーションで必ず紹介される展示の1つである。

- (7) ビジネス図書館はビジネススクール院生が主として利用する図書館であるが、ビジネス専攻は大学院だけではなく学部にもあるためメインライブラリーの一角に設けられている。ただし、図書館のなかではビジネススクールの建物にもっとも近いスペースに置かれており、ビジネススクール学生の便宜をはかっている。
- (8) Emory University (2007) *Campus Life Handbook 2007-2008*.
- (9) Candler Libraryはクラシックな雰囲気のある建物で、もとはメインライブラリーとして使用されていた。現在も一部は閲覧室と新刊雑誌・新聞コーナーとして使用されている。

(10) かつて筆者が大学院生として在籍したハワイ大学は東アジア関係の文献をまとめて1つのフロアにおい

さて、つぎに実際にある文献を探索する場合を想定して、図書館の利用方法を見てみよう。まず、IDカードを入口で機械に通して入館すると、正面がロビーとなっており、その奥にレファレンスデスクと、PCが置かれたStudy Areaがある。PCは、単に目録検索に使用するだけでなく、そこに資料を広げてレポートの作成などができるよう、広いデスクスペースが用意されている。モニターも席ごとに2つ置かれており、片方の画面で資料を検索しながら別の画面でレポートを書くといったことが可能である。



Study Areaのデスクスペース

文献検索はPCからオンラインカタログ (EUCLID: Emory University Computing and Library Information Delivery system) を呼び出す。このあたりは日本の大学の文献検索の方法とほとんど変わらないが、自宅のPCから利用する場合、特定のブラウザのなかにツールバーを用意して簡単にアクセスできるような工夫がなされており、非常に便利である⁽¹¹⁾。

さて、必要な文献が見つかったら請求記号をメモして、Tower Levelsの階へと向かう。日本のように開架図書、閉架図書といった区別はなく、貴重書を除けばすべての書籍は利用者に平等に公開されている。

前述したように一般書籍も雑誌も言語を問わず請求記号順に並んでいるので、エレベーター横の一覧表を確認すれば、どの階に配架されているかすぐに

わかる。例外は、メインライブラリー以外の図書館の収蔵資料や、マイクロ資料、政府文書などであり、それぞれ別の図書館や、別のコーナーへ行くことになる。

近年、雑誌に関しては急速にオンライン化が進んでいることはよく知られている。エモリー大学図書館もオンラインジャーナルの購読には非常に力をいれているようで、この原稿を書いている時点(2008年1月)で、購読雑誌数は約4万3千種類に達している。目録でオンラインジャーナルを見つけた場合、クリックすればそのままオンラインジャーナルのコーナーに飛ぶことができる。ほとんどのオンラインジャーナルは、IDとパスワードを入力すれば自宅など大学外からでもアクセス可能であるので、出先で閲覧したり、プリントアウトしたりして利用することもできる。

書籍を借り出す場合は、3階の貸出コーナーへそのまま持参する。教員の場合、貸出期間は1年間、冊数は無制限とのことである。窓口でIDカードを提示して、借り出すのは日本と同じであるが、面白いのは隅のほうに自動貸出機 (self check-out machine) という機械が1台用意されていることである。機械にIDをかざし、本についているバーコードをスキャンするとレシートがでてきて借り出すことができる。このとき、無断帯出防止用の情報も解除されるようだ。長い行列ができていたときなど、自動貸出機は非常に便利とのことだった。



自動貸出機

ていた。日本語の文献だけを探索する際には、確かに便利だと感じた。

(11) この機能はFirefox向けのアドオンとして用意されており、簡単にPCに組み込むことができる。

4 ライブラリアンと東アジア研究リエゾン

欧米の大学図書館と日本の大学図書館を比較してよく指摘されるのは、ライブラリアンの専門性に大きな違いがあることである。アメリカの大学図書館でライブラリアンという肩書きをもつ人は、個々に専門領域を持つと同時に、大学院レベルで図書館学の学位を取得しているのが一般的である。エモリー大学でもライブラリアンは、レファレンスデスクの奥にパーティションで仕切られたスペースを持っており、それぞれが独立した予算とアシスタントを抱えて業務に従事している。なお、ライブラリアンはそれぞれ分野別リエゾン（窓口）として外部に電話番号と電子メールアドレスを公開しているため、学生・教員はどこからでも直接、電話やメールで質問することが可能である。このリエゾンは表1のように、82の分野に分かれているが、複数の分野を担当するライブラリアンも多く、実数としては32名のライブラリアンでメインライブラリー全体をカバーしている。すなわち、担当する分野が1つのライブラリアンは10名、2つが8名、3つが8名、4つが3名、5つ7つ8つがそれぞれ1名ずつである（2008年1月現在）。

表1 Subject Liaison

1	African American Studies
2	African Studies
3	Anthropology
4	Art History
5	Biology
6	Business-Accounting
7	Business-Career Materials
8	Business-Decision Science
9	Business-Finance
10	Business-International
11	Business-Marketing
12	Business-Operations Management
13	Business-Organization & Management
14	Business-Real Estate
15	Career Resources
16	Chemistry
17	Classical Studies
18	Collection Management Librarian
19	Comparative Literature
20	Computer Science
21	Dance
22	Data Sets
23	East Asian Studies
24	Economics
25	Education
26	Environmental Studies
27	Film Studies
28	French Studies

29	Geospatial Information Systems
30	German Studies
31	Government Documents
32	Health, Phys Ed and Sports
33	History-African
34	History-Ancient & Medieval
35	History-East Asian
36	History-European
37	History-Latin American
38	History-South Asian
39	History-United States
40	International Documentation
41	Italian Studies
42	Jewish Studies
43	Journalism
44	Latin American Studies
45	LGBT Studies
46	Library Science
47	Linguistics
48	Literature-American
49	Literature-British
50	Literature-Comparative
51	Literature-East Asian
52	Literature-French
53	Literature-Latin American
54	Literature-Portuguese
55	Literature-Popular
56	Literature-South Asian
57	Literature-Spanish
58	Math
59	Middle Eastern Studies
60	Music
61	Neuroscience and Behavioral Biology
62	Philosophy
63	Physics
64	Political Science
65	Portuguese
66	Psychology
67	Psychoanalytic Studies
68	Reference Books
69	Religion-Buddhism
70	Religion-Christianity
71	Religion-Comparative & Other Religions
72	Religion-Hinduism
73	Religion-Islam
74	Religion-Judaism
75	Reserves
76	Russian and East European Studies
77	Science (General)
78	Sociology
79	South Asian Studies
80	Spanish
81	Theater Studies
82	Women's Studies

表2 エモリー大学図書館所蔵の東アジア研究関係資料¹

	総点数	新規受入数 ²	増加率
中国語の文献	14,586	1,882	14.8%
日本語の文献	5,315	1,042	24.4%
韓国・朝鮮語の文献	347	0	0%
東アジア言語以外の文献	97,128	459	0.5%
総数	117,376	3,383	3.0%

注1 たゞし、法科大学院図書館を除く。

2 2006年7月1日から2007年6月30日までの1年間

東アジア研究担当のライブラリアンは中国系の Guo-hua Wang (王國華) 氏であるが、同氏の担当分野は東アジア研究および、東アジアの歴史、東アジアの文学の3つとなっている。東アジア研究は中国研究、日本研究が中心であり、Wang 氏には日本人のアシスタントがフルタイムでついている。また最近では、韓国・朝鮮語の文献収集もスタートした。そのため、韓国人の大学院生をパートタイムで雇用し、業務を分担している⁽¹²⁾。

ライブラリアンの第1の仕事は、もちろん担当分野の収書業務だろう。東アジア関係には独立した図書購入の予算があり、その中が中国語、日本語、韓国・朝鮮語の文献に割りふられている。収書方針としては、まず基本的な文献をそろえることが必要であるが、それにくわえてエモリー大学研究者の専門分野の資料を充実させることも重要な役目である。たとえば、日本関係の場合、近世・近代史、近世文学、女流文学をそれぞれ研究する教員がいるので、この分野の文献は豊富に集められている。

収書にあたってライブラリアンは、1冊ずつすべて内容を確認し発注するという。こうした選定には取次業者 (vendor) から送られてくる目録が主として利用されるが、全米アジア学会 (Association of Asian Studies) 年次総会など、書籍展示が行われる際には出席して現物を確認することにも努めるそうだ。

2007年12月現在、エモリー大学の東アジア研究関係資料は、表2に示したような規模となっている。全体としては、英語文献が圧倒的多数をしめているが、中国語・日本語の東アジア言語文献が最近、大きく増えつつあることがわかる。なお、韓国語は昨

年度予算がなく受入はなかったが、今年度は予算がついたので増える予定とのことだった。

このような収書にくわえライブラリアンの第2の仕事は専門領域の情報検索について適切な助言を与えることである。すでに、ライブラリアンは全員、オフィスの電話番号と電子メールを公開し、いつでも質問に答えられるようにしていると述べたが、それ以外にも多くのチャンネルで情報提供が行われている。

まず、最初に定期的を実施されるワークショップがある。たとえば、今学期は学期はじめの10月12日に「東アジア研究の情報源」と題する1時間のワークショップが図書館のなかで実施された。このワークショップの内容は次のように案内されている⁽¹³⁾。

このワークショップは、東アジア出身の学生にどのようにして図書館の東アジア関係の文献を利用するか、すなわち、図書館が購読しているオンラインデータベース、たとえば China Academic Journals、China Newspapers films、Japan Magazine Plus およびそれ以外の英語資料の利用方法を紹介する。さらに、このワークショップでは、図書館の相互貸借など図書館サービス利用の詳細についても説明する。

このように外国語を使用できる学生、つまり主として留学生を対象としたサービスは日本の大学でも検討してもよいのではないかと思う。

さらに、もっと一般に東アジア研究に関心のある学生・教員にたいしては、ウェブサイトを通じた情報提供が行われている。具体的には、メインライブ

(12) 以下の記述は、2007年12月12日に行った Guo-hua Wang 氏へのインタビューにもとづいている。

(13) *Workshop Tracks Fall 2007*, Woodruff Library Research and International Services.

ラーのウェブサイトのの中にリサーチガイドというリンクが設けられており、ここをクリックすると専門分野ごとのリンクへつながる。東アジア研究リエゾンのリサーチガイドもそのなかの1つである。

東アジア研究のリサーチガイドは、①どうやってリサーチを始めるか、②エモリー大学のリソース、③エモリー大学以外のリソース、④その他の情報という4つの項目からなる。①は、あらかじめキーワードが用意され、エモリー大学図書館のオンラインカタログで文献を探索できるようにした簡単なデータベースである。たとえば、「JAPANESE LANGUAGE GRAMMAR 日本語 文法」という項目をクリックするとエモリー大学図書館に収蔵されている日本語文法に関連する書籍がすべて一覧表示される。初学者にとって大変便利なサービスだろう。②は、エモリー大学が所蔵するCD-ROM、オンラインデータベース、新聞、辞書の一覧である。③は大学以外のウェブ上で利用できる資源の一覧である。日本関係では、国会図書館、国際大学、国文学研究資料館などのウェブサイトが紹介されている。④は、エモリー大学で受講することができる授業科目の一覧である。



東アジア研究のリサーチガイド

このような全体的な情報提供にくわえ、最近では個々の授業にたいしてライブラリアンと担当教員が協力しながら情報提供のウェブサイトを構築するというサービスも始まった。このサービスは、あくまで教員が希望する場合にのみ提供されるとのことであるが、ウェブサイトを利用することにより、いつでもどこでも必要な情報への第一次アクセスが確保

されるので、学生にとって非常に親切なサービスだといえるだろう。また、ウェブサイトの構築方法に熟知していない教員にとって図書館のサポートは、大いに役立つに違いない。日本の大学でも、ウェブサイトを利用した授業支援が計画されるようになったが、エモリー大学のような図書館をベースにした取り組みは大いに参考になるのではないと思われる。

5 おわりに

アメリカの大学におけるライブラリアンの重要性和地位の高さについては、これまでも多くの指摘がされてきた。エモリー大学でもライブラリアンは、教員と対等の地位にたつて、教育・研究活動に従事しているという印象を強く受けた。その点を象徴するエピソードとして、教員採用人事にもライブラリアンが加わっている点をあげることができる。つまり、東アジア研究の教員を採用する場合、東アジア担当ライブラリアンも人事委員会に加わって発言権を持つのである。このような制度は日本ではまず考えられないことだろう。

しかし、ライブラリアンの重要性は、こうした制度的な面ばかりでなく、実際に教育・研究に深くかかわって活動している点こそが重要だろう。エモリー大学東アジア研究ライブラリアンのWang氏は、個々の教員の研究活動や、授業内容について詳細に把握していた。授業のシラバスができあがると最初に目を通すのは、ライブラリアンだという。なぜなら、授業がスタートするまでに必要な文献をリストアップし、学生からの質問に答える準備することが大事だからである。エモリー大学図書館における、このようなライブラリアンの活動は、授業支援という分野に真剣に取り組むようになった日本の大学にとって、参考になる点が多いといえるだろう。

(本稿を作成するにあたり、エモリー大学東アジア研究プログラム所長のMark Ravina准教授、図書館東アジアリエゾンのGuo-hua Wang氏、野沢悦子氏から多くのご教示を得た。記して、感謝申し上げる次第である)

(はまの きよし 経済学部教授)